研　究　成　果　報　告　書

令和８年　　３月　３１日

１．所属・職・氏名　等

文学部　国文学科・講師・陳　佑真

２．研究課題（テーマ）名

日中漢文学の近世・近代における展開

３．研究期間

２０２５年４月１日～２０２６年３月３１日

４．利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金（合算分を含む）412,371 円

５．研究の概要

日本および中国において、漢文学が歴史的に展開してきた軌跡をたどる。

報告者の専門分野に当たる儒学（とりわけ宋代学術・朱子学）は、日中いずれにおいても人々の思想の中できわめて大きな役割を果たしてきた。しかし、果たして儒学というのが日中両国においてそれぞれいかなる具体的内容をもったか、歴史的にいかに展開してきたか、という事柄についてはいまだに不明な点が多い。

本研究において報告者は、日中両国の近世・近代の知識人たちが作成した儒家経典の注釈書や儒学思想の表象である詩文を精読し、儒学が日中両国において定着・衰退する過程を歴史的に分析することで、東アジア思想のあゆみを総体的に把握することを目指した。

具体的には南宋期の『周易』注釈書の読解から中国における朱子学普及の展開の分析、摂関政治の思想的中核をなす君権思想にまつわる平安朝ならびに唐宋における両国の言説の比較、清代の史学思想において重要な役割を果たし近代日本で高い評価を受けた章学誠の学説が形成される過程についての分析、明治期における日本の漢学者と清国外交官との応酬漢詩に見られる日本像の分析、近代日本漢学の代表的人物の一人である諸橋轍次の漢詩の分析に取り組み、それぞれ成果を上げた。

６．研究成果等

上述の研究の成果として令和７年度には６本の論文を発表した。

「従蜀学到理学――以李杞≪用易詳解≫為例」（論文（１））は、令和６年１２月に行った国際朱子学学会での発表の内容を中国語論文として整理したもので、朱子学が隆盛した南宋時代、儒学の経典の注釈を作っていた人々が無意識レベルで朱子学の世界観に影響されてゆく過程を李杞という人物の『周易』の注釈を例に分析したもの。口頭発表資料に当日の議論

を踏まえて修正を加え改編した。

「唐宋儒学における周公評価と平安朝漢文学――摂政·摂位および君臣一体論を中心に――」(論文(2))は、令和6年度に行われた和漢比較文学会大会での発表を元にした論文で、ややもすれば皇帝(天皇)の職権を侵犯するものとも見られる摂政という制度への評価が中国で唐から宋にかけて徐々に批判的なものへと変化してゆく過程を分析し、日本の平安朝への唐代儒学の影響を論じた。

「書簡から見る章学誠の生涯と交友」(論文(3))は章学誠という清朝時代の重要な思想家について、その残された書簡を手掛かりに周囲の人間との関係を復元しようと試みた。出版社側の要請により、専門家以外の方にも読んでいただけるよう図版を多く取り入れ、教育普及的意義をもたせるよう注意した。

「石川鴻斎編纂『芝山一笑』訳注稿」(論文(4)·(5))は、明治時代の石川鴻斎と清の外交使節との漢詩の応酬を和訳したもの。原典は、十九世紀の中国の知識人が日本をどう認識していたのか、また、日本の漢詩人が中国から来た知識人にどのような接し方をしたのか、ということがよくわかる貴重な資料で日中交流史の研究にも大きな意義をもつ。

「『止軒詩艸』訳注」(論文(6))は、令和6年度より本学『国文学論考』に連載を始めたものの第二弾に相当する。新潟県三条市にある諸橋轍次記念館のご協力をいただき、大変貴重な自筆原稿などを利用して従来の研究では明らかにされてこなかった知見を盛り込むことができた。近現代日本を代表する漢学者である諸橋轍次の漢詩の現代語訳が普及することは近現代日本の漢文学の一つの到達点の様相を明らかにすることにつながる。また、諸橋轍次は本学初代学長でもあり、その詩の訳注は校史研究にもつながるものと考えている。とりわけ本学学生に関心をもっていただきたいと願い、学内での入手が容易な媒体での連載を行っている。

論文以外では、京都大学人文科学研究所の主催する共同研究班の二つに共同研究班員として参加している。古勝隆一教員の主催する「『玉燭宝典』研究班」は日本にのみ残っている中国中世の歳時書の貴重な写本の整理事業で、日本漢学史上重要な意味をもつ。永田知之教員の主催する「中国近世の文学理論と表現の技法研究班」は元時代の文学理論書『文章欧冶』の訳注を作成する事業で、とりわけ報告者の主たる研究対象である蘇軾や宋代の儒学との関わりから中国近世の学術史の姿を明らかにすることに主眼を置いている。この両研究班で口頭発表を行った(発表(1)·(2))。これらの成果は京都大学人文科学研究所よりの刊行が予定されている。

7．研究の実績(論文・発表　等)

[論文]

(1)「従蜀学到理学――以李杞≪用易詳解≫為例」(『UIA ブックレット2――何為東亜思想中的“伝統”？』)

(2)「唐宋儒学における周公評価と平安朝漢文学――摂政・摂位および君臣一体論を中心に――」(『和漢比較文学』第75号)

（３）「書簡から見る章学誠の生涯と交友」（古勝隆一・竹元規人編『中国学術を貫く視座――章学誠の可能性』）
（４）「石川鴻斎編纂『芝山一笑』訳注稿（一）」（『駒澤大学外国語論集』第３９号）
（５）「石川鴻斎編纂『芝山一笑』訳注稿（二）」（『駒澤大学外国語論集』第４０号）
（６）「諸橋轍次『止軒詩艸』訳注（二）」（『国文学論考』第６２号）

［発表］
（１）「『玉燭宝典』研究班発表」（京都大学人文科学研究所共同研究班、７月１５日）
（２）「中国近世の文学理論と表現の技法研究班発表」（京都大学人文科学研究所共同研究班、１２月２３日）

［学術貢献活動］
（１）日本中国学会第７７回大会司会　田村有見恵氏（東京都公立学校）「蘇軾、蘇轍の窮理、尽性、至命の学」（１０月１２日）